

あらゆる領域のヒントが詰まっている

古典籍（和本）をどう読み、理解し、活用するか。
和本教育の実践記録を伝える冊子、最終号！

▼和本リテラシーニュースとは

〔実践記録 中学生・高校生対象〕

1 くずし字を読む動機づけ…紅林健志（盛岡大学）
——桐蔭学園における出前授業報告——

〔実践記録 中学生・高校生対象〕

2 和歌を題材とした授業実践…速水香織（信州大学）

〔実践記録 中学生・高校生対象〕

3 古典の重み…神作研一（国文学研究資料館）

〔実践記録 中学生・高校生対象〕

4 くずし字教材の開発と実践…山田和人（同志社大学）

〔和本リテラシーニュース〕を振り返って（柳沢昌紀）

▼出前授業のあゆみ（二〇一八～一九年度実施分）

▼出前授業の実施について

▼編集後記

編集●日本近世文学会

Take
Free

和本リテラシーニュース

vol.5



和本リテラシーニュースとは

ここである「和本リテラシー」とは、広い意味では、江戸時代末までに書写もしくは刊行された古典籍（和本）をどう読み理解し、そして活用していくかといった、日本古典籍に関わる総合的な能力を指すものです。と同時に、狭い意味では、いわゆる「くずし字」（変体仮名）の読解能力を指します。

昨今、この種の能力はいっそう衰退の一途を辿っていますが、二十一世紀を迎えて、日本の現状が混迷を深めれば深めるほど、〈古典〉の重要性は増していると見るべきでありましょう。〈古典〉は文学だけではなく、あらゆる領域に存在します。さまざまなヒントが詰め込まれている〈古典〉を存分に理解し吸収するために、今こそ「和本リテラシーの充実を」と願わずにはいられません。

このリーフレットは、「和本リテラシー」の実践記録を集積し発信することで、古典もしくは古典籍を学ぶ方はもちろんのこと、教える立場にある方々にも一つの指針（モデルケース）としていただけるように願って発行されます。

どうか、小さな動きがやがて日本各地で大きなうねりに発展し、老若男女がみな自力で、〈古典〉の豊かさを存分に享受できる日が来ますように。

二〇一五年七月

日本近世文学会 広報企画委員会

* 第1号「刊行にあたって」を転載

くずし字を読む動機づけ

——桐蔭学園における出前授業報告——

紅林健志（盛岡大学） KUREBAYASHI Takeshi

桐蔭学園の中学三年生を対象とした近世文学会の和本リテラシー講座を、二〇一七年と二〇一八年の計二回担当させていた。本稿はその二〇一八年の実施報告である。

動機づけを重視

二〇一八年の授業では動機づけを重視した。はじめにくずし字について説明する。さらに、現在、読める人が減ってきていることにも触れる。危機感をあおることで当事者意識を持ってもらうためである。それだけでは動機づけとして弱いので、くずし字のすぐれている点についても触れる。この出前授業では共通の教材として身近なくずし字を読むもの（割りばしの袋など）が与えられている。この共通教材を使用して、割りばしの袋の「御手^{おて}もと」の文字を読んでもらう。そのとき、同時にデザイン性にすぐれているから、現在でもくずし字が使用されていることに注意を向けさせる。別の授業で、くずし字を使用しない割りばしの袋を多数集めて比較してみせたが、そうすると

生徒もくずし字がデザインとしてすぐれていることに賛同してくれる。

実際に和本をさわってもらう

次に架蔵の和本を配布して実際にさわってもらう。当日は六人程度のグループに分けて、和本を手にとって、現在の本とのちがいや、和本のすぐれている点について考えてもらった。和本のすぐれている点としては、具体的に次のような本を使用して説明している。

『秋萩帖^{あきほぎしょう}』^{はんぽん}の版本を国宝の写真と比較させて、江戸時代の技術の高さに注意を促す。さらに、架蔵のものは折本^{おりほん}なので、折本の装訂が書道の手本として、必要な分量を広げられる、押さなくても開いたまま使用できるなど、洋装本より使いやすいこともあわせて説明する。

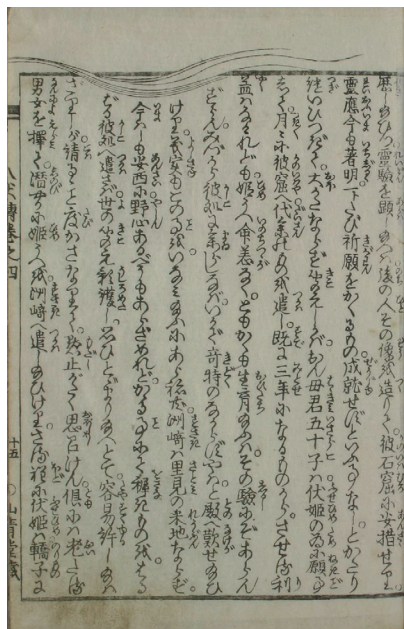
また、『方鑑秘訣集成^{ほうかんひけつしゅうせい}』（文化十四年（一八一七）序刊）を見せる。この本の「三元九宮并八門遁甲天盤地盤合図^{さんげんくわうきゅうなひははちもんてんてんてんあいはんちばんちばんあひあつず}」^{きつてん}「吉神

飛泊循環図」は中央の円盤が回転する特殊な造本になっている。これを見せて大量生産ではできない和本の手作りの魅力を教える。

そのほか、光悦謄本の複製を使用して、本の紙は白いものという固定観念を持っている生徒に、装飾料紙を使用した造本の美しさを見せる。

和本のすぐれた点については生徒自身に気づいてもらうのが一番だが、限られた時間の中ではなかなかむずかしく、こちらから積極的にヒントを与えた。

右のような本を一グループにつき一点配布できると理想なのだが、和本の数には限りがあり、全体にうまくゆきわたるとは限らない。そこで、配布資料でも説明する。資料には『南総里



(早稲田大学図書館蔵)

見八犬伝」肇輯巻之四「瀧田の近村に狸狗の児を孚む」図【図1】を載せた。この図は丁の表で、本文の上を人魂が飛んでいるのが、めくって丁の裏に行くと、その人魂（玉梓の怨霊）が八房に取り憑くという仕掛けになっている。現代の本ではまず見られない技法である。これを手書きだから出てくる発想であり、手作りだからできる表現であると強調する。実際、岩波文庫版では再現されていない。和本で読まなくてはならない、と述べるゆえンである（実際は新潮日本古典集成で再現されているが）。パソコンで書いている現在の作家にはこうした発想がないからダメなのだとかしてみてもよいだろう。また、当日はしなかったが、袋綴本の特性として、表と裏を同時に印刷するので、ページをまたがる表現が簡単にできるという説明の仕方も有効かもしれない。

以上のような和本に特徴的な表現をとりあげて、現代の書物の表現が一面では和本のそれに比べてはるかに貧しいものであることを説明し、生徒の和本への興味・関心を引き出すようにしている。

実際に読んでみる

ここまでで、基本的な説明を終え、実際に読んでゆく作業に入る。生徒にとってもなじみの深い「桃太郎」の話をとりあげる。『近世子どもの絵本集 江戸篇』（岩波書店、一九八五年）の「桃太郎昔話」【図2】を使う。現在と字母の異なる仮名のみを空



図1 『南総里見八犬伝』「瀧田の近村に狸狗の児を孚む」図



図2 『桃太郎昔語』

欄にした^{ほんじ}翻字を与え、文脈から文字を推測してもらい、配布の一覧表で確認するという手順で進めてゆく。生徒の知っている「桃太郎」の話とのちがいや、犬、猿、雉が人間の服を着ている挿絵の表現などにも注目してもらいたかったが、時間の関係で少ししか読むことができなかった。時間配分にはもう少し工夫が必要であった。

授業後に一人の生徒が「八犬伝」が好きなんですけど、どこで和本って買えますか」と質問に来てくれた。うれしかったが、一方では新潮日本古典集成には触れないという恣意的な説明をしたことにやや心が痛んだ。

和歌を題材とした授業実践

速水香織（信州大学）HAYAMI Kaori

二〇一七年九月二十七日（水）、長野県飯山高等学校からの依頼を受け、出前授業講師として勤務校から同高校に派遣された。同高校は、長野県北部の飯山市にある公立学校で、スーパーサイエンスハイスクール（第2期）に指定されている。当日は一・二年生および三年生の希望者を対象に多様な研究領域にわたる全十三クラスの講座が開講、生徒は希望するクラスを選択し受講するかたちで出前授業が開催された。

講座を担当するにあたっては「日本文学の講座を希望する生徒」が対象であることを前提として内容を組み立てた。ただし、六〇分で完結させる必要があり、作品の概要や場面の説明に時間を要することは避けたかったため、中高生にとって、おそらく最も身近な古典作品のひとつと思われる「百人一首」所収の和歌を題材としてとりあげることとした。

当日の授業内容は以下の通り。

- ① 講師自己紹介・「百人一首」についての知識（五分）
- ② 「百人一首」の紹介・成立について（二〇分）
- ③ 和歌解釈について（二十五番歌・七十二番歌）（二〇分）

④ 文字表記について・くずし字で読んでみる（一五分）
まず、①講師の自己紹介を行ったのち、生徒たちに「百人一首」について知っていることを尋ねた。

受講者たちからは、次のような反応が返ってきた。

- ・鎌倉時代に作られた作品で、藤原定家作。全百首。
- ・中学時代、冬休みの宿題で覚えさせられて辟易した。
- ・かるた遊びができる。
- ・コミックになっている。

おおむね予想された回答を得たところで②④を展開した。②「百人一首」は、藤原定家がさまざまな作品に所収の和歌から百首を撰んだものであることを確認し、定家撰とされるのは『明月記』の記述に基づいていることなどを説明した。その際「百人一首」のコミカライズ作品としては最新で発行部数も多い『超訳百人一首うた恋い。』（杉田圭著、渡辺泰明監修、メディアファクトリー二〇一〇～一三年）第二巻の当該場面をプロジェクトに投影しつつ、配布プリント（7頁QRコード参照）では根拠となる『明月記』記事を、書き下し・現代語訳をつけて

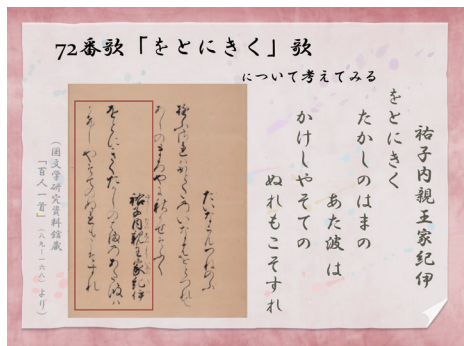
掲載した。

また本作品は、歴史的に多くの注釈書が作られて和歌の解釈が検討され続けてきたこと、江戸時代には手習いの書としても重宝され、絵入りの木版本が流布した【スライド1】一方で、かるたとしても親しまれたことなどを紹介した。ここで生徒たちからは「百人一首が現代までどう受け継がれてきたかは考えたことがなかった」「暗記するとき、和歌を何度も書き写した。自分たちが江戸時代人と同じ作品で同じように勉強しているとは思わなかった」との声も漏れた。

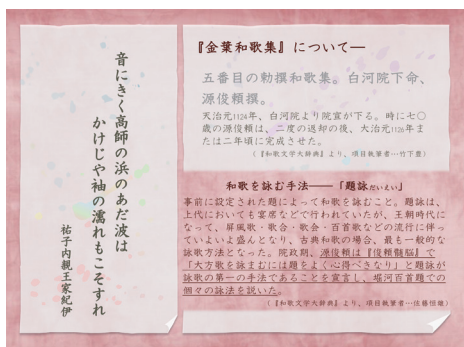
③今回の授業では七十二番歌をとりあげた。画像とともに本文を提示し【スライド2・3】、当該和歌が「堀川院艶書合」



スライド1



スライド2



スライド3



授業の目的にとつた。この質問は、の質問と意見が出た。この質問は、

において詠まれ（ここで題詠についても簡単に説明）、『金葉和歌集』にとられたのち「小倉百人一首」に選ばれたことを説明し、諸注釈書においてどのように解釈されてきたかを、注釈書の本文をあげて概説した。

なお、七十二番歌をとりあげたのは、高校生にも身近に感じやすい恋歌であることと、題詠の説明に適すると判断したことによる。

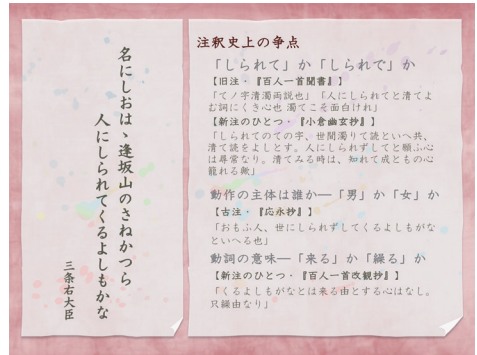
このほか、たとえば二十五番歌は、注釈書によって解釈に相違が見られることを紹介した【スライド4】。ここで生徒に「あなた方ならどのように解釈するか」と問いかけてみたところ、複数の生徒から発言があったが、その中で「この歌はどんな場面で詠まれたのか、題詠なのか。それによって解釈は変わってくると思う」という内容の質問と意見が出た。この質問は、

て大変ありがたかったが、時間の制約もあり「当該歌は『後撰和歌集』所収の和歌で、そこには詞書ことばがきがついている。平安時代の恋のあり方も含め、ぜひ調べてみてほしい」と回答した。

④ ここで、スライド1・2を再度映し、昔の文献（特に和歌）は、

句読点はもちろん、伝統的には濁点もつけない場合が多いことを説明した。スライド1本文に濁点が朱で書き入れられていることを説明すると、生徒たちは文字表記の歴史にも興味をひかれた様子だったが、今回は七十二番歌本文を活字化してみることを提案し、取り組んでもらった【プリントおまけ】。正解がわかっているため、全員が実にスムーズに活字化作業を終えたところで、字母じふを併記した解答を配布し、くずし字の知識は、特に江戸時代以前の文献を読むために必須の知識であり、ひらがなが読めるだけでも、格段に世界が広がることを伝えた。

中高生を対象として古典文学をテーマに授業する際には、古典とは現代と切り離されたものではなく、連続した時間軸の中



スライド4

※ 写本の字（くずし字）を活字化する―解説
おまけ

に位置するものであり、先人のたゆみない努力によって現代に受け継がれていること、そしてわたしたちは、これをどのように未来に受け継ぐのかという責任を負う存在であることを伝えたいと考えている。そこで今回は、注釈の細かい現代語訳までには踏み込まず、ひとつの古典作品に長い歴史と多くの研究が蓄積されていると伝えることを主目的として内容を構成してみた。

最後に、授業での使用画像は、すべて国文学研究資料館蔵本の公開データベースによることも紹介したが【スライド5】、生徒たちはその存在を知らなかったらしく、日本文学専門の研究機関の存在と、貴重な画像が無料で公開されていることは、新鮮な驚きであったようだ。



スライド5



プリントおまけ

古典の重み

この五年ほどの間に都合五回、中高生を対象とした「出前授業」を担当した——和洋九段女子高（高3）・桐蔭学園中（中3）・中大杉並高（高3）——。受験を控える以上、中等教育が古典文法に傾斜しがちなのは致し方ないことだと認めつつも、その折々の出前授業の現場では、いかに古典の重みを「軽快に」伝えるかに力点を置き、「くずし字」と「古典籍」に寄り添いながら試行錯誤を繰り返した。教室で、彼らの様子をダイレクトに感じることはできたのは何より大きな財産であり、以下いくつかの観点に分けていささかの感想を綴ってみたい。

何を伝えるのか

「生・そ・ば」とか「お・て・も・と」などのように、くずし字の楽しさとおもしろさを伝えることも重要だが、それとともに大切なのはやはり、古典を学ぶことの意義を理解してもらうことだ。今はネットの時代だが、二十世紀までは人類のすべての叡智（インテリジェンス）は書物の中に存在したのであり、古典こそ現代を生き抜く指針（しるべ）になり得ることを繰り返

返し訴えた。過去に学ぶことこそ、未来への展望を切り拓くための最も重要な方法／活力なのだと。

古典のカタチ 古典のチカラ

しかも古典は、文学だけでなくとどまらない。医学にも数学にもあるいは料理にも古典は存在するのであり、そうした文化

神作研一（国文学研究資料館）KANSAKU Ken-ichi

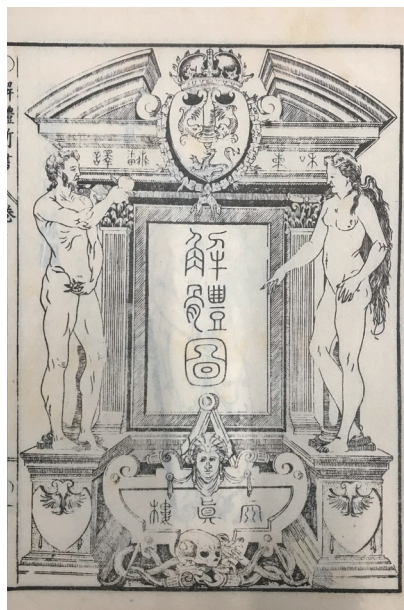


図1 『解体新書』（複製本）

史を意識してもらえように、古典籍は『解体新書』(安永三年「一七七四」刊の複製本)【図1】と『塵劫記』(寛永十一年「一六三四」刊)【図2】を用意した。「ねずみ算」の項でねずみの絵を具備するのは寛永頃の刊行にかかる古版に限られるので、四百年前の和紙の手触りの感覚をカラダごと感じてもらった。

また、生徒たちがよく知っている古典としてカルタ(百人一首)を、そして絵のチカラを感得してもらうために『一休骸骨』(「元禄頃」刊)【図3】も持参した。流麗な筆跡を持つ絹本のカルタの感触も、飄々とした骸骨の楽しげな挿絵も、それぞれに印象深かったようだ。

デジタル画像の全盛期だからこそ、原本(古典籍)のチカラは絶大だと再認識している。

くずし字を〈書く〉

高校長の許可を得て、直近の出前授業には、書家で都内中学非常勤講師の柴田敬子先生(一九九五年金城学院大学卒業・神作ゼミの一期生)に同行してもらい、実際にくずし字のデモを披露してもらった。生徒たちの手をとって、毛筆で自分の名前をくずし字で書く体験に、彼らはいきなり大きな関心を寄せた。アタマで学ぶだけでなくカラダごと学ぶこと、古文(くずし字)と書道(かな)のコラボは有効だとの確信を持った。



図2 『塵劫記』(寛永11年刊) ねずみ算の項

出前授業のこれから

生徒たちに「生きた」授業を実践することが前提だが、あわせて重要なのは、現場を預かっておられる国語科の先生方との「緊密な」連携だと思う。ワークショップなどでもいい、日本近世文学会による出前授業の試みが、国語科の先生方との「組織的連携」に発展したとき、わたくしどもの出前授業は次のステップに進めるのだと期待している。

★和洋九段の上野正史先生（現駿台甲府高）・菅谷真由先生と桐蔭学園の川妻篤史先生、そして中大杉並の菊地明範先生による日ごろの丁寧な指導があったからこそ、小生のこのささやかな出前授業が成立したことを、感謝とともに明記しておきたい。



図3 『一休骸骨』（元禄頃）刊



出前授業の様子

くずし字教材の開発と実践

山田和人（同志社大学）YAMADA Kazuhito

今回の出前授業は以下の日程で実施した。七月十七日（水）一〇時五〇分から一二時二〇分、夏期講習の時間帯で実施。同志社女子中学校・高等学校、中学三年生WRコース（理系）の生徒（四十二名）だった。授業タイトルは「昔の文字で読んでみよう」。大八木宏枝教諭のクラスで実施した。当日、四六名程度のグループを編成し、議論しやすい体制を整えて、最初に和本のいろいろを見せ、なじみの深い地名が出てくる『伊勢参宮名所図絵』を直接さわって閲覧させた。その後、くずし字演習に入った。後述する教材プリントを配布して、グループワークの中でそれぞれが課題に取り組んだ。「くずし字一覧表」も配布している。残りの二〇分で理系クラスを意識して、からくり人形の話と愛知県半田市亀崎潮干祭の「布ざらし」の映像を見せ、最後からくりの絵尽しを全員で読み解いて、授業の成果を確認して終わった。

くずし字に興味を持ってもらうためには、やはり学習者自身が見て、感じて、考えることができる教材プリントが必要である。今回の教材プリントも当日配布し、その中から数点を選ん

で授業中にくずし字の演習を行った。その後、教材と解説を自宅で家族と一緒に解いたということが事後に回収されたコメントシートに書かれていた。くずし字が家族の話題になるだけでなく、家族で学び合うことにも通じ、くずし字学習が生涯学習的な意味を持つことを証明できた。

この教材開発には実は同志社大学翻刻はんとくの会の活動が大きく関わっている。翻刻の会は学部生が自主的に翻刻に取り組み、その成果として未翻刻の浄瑠璃作品を『同志社国文学』に投稿してきた。結成して三十年以上経過している。投稿した翻刻もすでに十数点が掲載されている。翻刻の会の公認アプリとして「FLA（フロー）」を学生は日常的に活用している。この翻刻の会の入門教材として今回紹介する教材プリントを作成した。

まず、初学者に興味、関心を持ってもらうことが第一であり、学生の学習意欲を高めることが目的であった。入会者を増やすための方策でもあった。そのために近世版のクイズである『とんさく新じ口』（『近世子どもの絵本集 江戸篇』（岩波書店、一九八五年、三三八〜三四三ページ）を採用した。四十点中



①ねづみしきぶ



②つるかめまつだけ

二十点を選定した。初学者にとって、絵と文字が組み合わせられている教材が最適であるが、その中でも本稿で紹介する教材は絵と文字がリンクしており、絵と文字の両方の読解を楽しむことができる。読めない文字も絵から読み解くことができる。文字が読めれば絵も読み解くことができる。この相補性にすぐれた視覚的な教材が初学者にとっては最適である。

以下、具体的に教材を紹介し、指導の留意点を記す。

①「ねづみしきぶ」

i 絵に注目させて、王朝の御帳台風の調度の前に座る平安貴族の女性の顔が人間ではないことに気づかせる。絵と文字を一体として読むコツを伝える。ii 平安時代の女流作家というヒントを与える。と、すぐに紫式部の名前があたり、「しきぶ」と読むことができ、「ねづみしきぶ」と読解できる。iii 典拠は和泉式部であり、「いづみしきぶ」の一字を変更して、絵の人

物の顔をねづみに変えて、「ねづみしきぶ」と洒落していると読解できる。この教材によって、ふだん使っているのとは異なるひらがなの字母があることに気づくこと、また連綿体で書かれているので、何文字分かを見抜くことも大切だということが理解できるのがスタートダッシュとしては効果的だ。

②「つるかめまつだけ」

i 初学者にははじめて見るひらがなが多いので、絵に注目させて、この人物は何をしているか、釣り竿を垂れていること、釣っているのが魚ではなく亀であることに気づかせる。それが文字のどれと対応しているか考えさせる。絵の「亀」から「かめ」、さらに釣りをしているので「つり」と読解できる。ii 問題は「まつだけ」である。そこで釣り人がどこに座っているのかというヒントを出すと、観察力の鋭い学習者はそれが川辺の岩ではないことに気づく。そこで俯瞰的な視点で全体を見直すと、そこに「松茸」のかたちが見えてくる。そうすると「松茸」という文脈の中で、「まつだけ」と読解することができる。iii まさに釣り人が、亀が釣れるのを待つばかりという文意が読み取れる。「つる」に「鶴」、「かめ」に「亀」、「まつ」に「松」とおめでた尽くしになっていることも示唆する。ここで重要なのは、川辺の岩と見えたのが視点の転換によって松茸のかさである



③やんま大わう



⑤人目のすかたしばしとゝめん

ことに気づくことが「文学」的に読む楽しさであることだ。

③「やんま大わう」

i 絵の姿かたちから閻魔大王と気づかせる。ii 閻魔大王の冠にトンボが止まっていることに注目させる。iii そこからトンボの「やんま」を連想する生徒が出てくる。このように生き物を素材にした教材は学習者にとっては親しみやすいようだ。

⑤「人目のすかた しばしとゝめん」

i 漢字と罫字（踊り字）「ゝ」が用いられていることはあらかじめ伝える。絵の僧侶がぶら下がっている四角の看板をじっと見ていることに注目させる。看板には「人目」が描かれ、その間に「めくすり」とあり、目薬屋の看板であることがわかる。そうすると「人目の」の次が「すかた」と読める。「す」以外の「か」も「た」も①、②で既出なので、そのことに気づく。最後の「とゝめん」はおおよそ読める。iii そこで百人一首の歌で、僧侶の姿

が、僧正遍昭がたまたま出会った目薬屋の看板に描かれた人目の目をしばし眺めているという意味であり、恋の歌が目薬屋の看板に目をとめる日常的な歌に転換するおもしろさを読み取ることができる。このようにくずし字の教材で重要なのは自分たちの知識や情報を活かして作品の意図を読解するおもしろさを実感させることだ。

今回の授業実践で配布した教材プリントと解説（PDF）を大学のサーバーにアップロードしている。以下のQRコードを読み込んでご利用ください。①から②を適宜組み合わせ使ってください。解説では、出典や典拠とすることが多い。中学生にはなじみがないので、思い切ってネタという言い方になっている。二〇二一年度末までダウンロードできるように設定している



といえば、どんな作者がいるかと問かけ、そのつもりで見ると百人一首の歌が浮かんでこないかと重ねて問うと、僧正遍昭の「あまつかぜ雲のかよひち吹きとぢよ 乙女のすがたしばしとどめむ」の下句であることに気づく。「しばし」の「は」が新出だが、典拠から見当をつけることができる。そこで「人目のすかた しばしとゝめん」

「和本リテラシーニュース」を振り返って

「和本リテラシーニュース」は、和本リテラシー教育マニュアルを開発するために、実践記録を集積・公刊することを目的として、二〇一五年七月に第一号が刊行された。当初は第三号まで紙媒体で発行し、その後はWEBのみで継続する予定であったが、議論を経て、第五号まで出版することになった。すなわち本号がひとつの区切りということになる。そこで、これまでのニュースを振り返っておくことにしたい。

第一号は、四本の実践記録を収載した。小中学生対象が一本、大学生対象が二本、社会人対象が一本であった。

第二号は、五本の実践記録を載せた。小学生対象、中学生対象、大学生対象、外国人対象、国際シンポが、それぞれ一本ずつであった。

第三号も、五本の実践記録を掲載した。中学生対象が二本、大学生対象、社会人対象、外国人対象が、各々一本ずつであった。第四号は少し趣向を変えて、実践報告を三本、教材と参考資料を五本載せた。いずれも桐蔭学園中学校男子部・同女子部・中等教育学校の中学三年生を対象としたものであった。

そして本号は、四本の実践記録を載せた。東京、神奈川、長野、京都の各地における中学生、高校生対象の授業の報告である。

第一号から第三号までは、さまざまな人々により、いろいろな場所で教育実践が行われていること、また実践者それぞれの

工夫、やり方がなされていることの紹介を主眼とした。和本リテラシー教育の多様なニーズを掘り起こし、受講者に即した取り組みが種々行われていることを、本学会会員以外の方々の協力も得て公にすることを目指した。あわせて、くずし字学習に役立つ書籍やWEBサイトなどのコンテンツの紹介も行った。

第四号、第五号では、対象者を中学生、高校生に絞り、実践の記録を載せるとともに、使ってみて効果的であった教材の紹介を中心とする紙面構成とした。第四号は内容を欲張りすぎて、肝心の教材が小さくてわかりづらくなってしまったという反省点が残ったが、同じ中学三年生を対象としてさまざまな教材、教え方が展開されたことの記録であり、一定の意義があったのではないかと思う。本号は前号の反省に基づき、執筆者の人数を絞り、教材を前面に示すかたちの記事となるように心がけた。本学会における和本リテラシー教育に関する議論と実践の積み上げは、そのニーズの存在と教育の有用性を明らかにすることとなった。会員諸氏の日の当たらない場所での実践の成果を紹介し、教材の共有化を図る、新たな試みの必要性を実感する。今後は、学会としての出前授業を継続するとともに、本ニュースの記事を核として、さらなる実践と教材の紹介を行うべく、和本リテラシー教育関連書籍の出版に向けて歩みを進めてゆきたい。これまで以上に多くの方々のご協力が必要となることを申し述べて、振り返りのまとめとする。

（柳沢昌紀）

出前授業のあゆみ（二〇一八～一九年度実施分）

◆和洋九段女子中学校高等学校（高三）

二〇一八年七月三十日

「古典の楽しみ―江戸の本とくずし字と―」（神作研一）

◆中央大学杉並高等学校（高三）

二〇一八年九月二十八日

「古典のカタチ―江戸の本とくずし字と―」（神作研一）

◆愛知県立瀬戸窯業高等学校（高一）

二〇一九年二月二十五日

「和本にふれてみよう!」（加藤弓枝、後藤あや）

◆国立名古屋大学教育学部附属中学校（中一）

二〇一九年三月十八日

「くずし字を読んでみよう」（加藤弓枝、三宅宏幸）

◆同志社女子中学校・高等学校（中三）

二〇一九年七月十七日

「昔の文字で読んでみよう」（山田和人）

出前授業の実施について

日本近世文学会では、くずし字の読み方や和本を知っていただく一助として、学会員を講師とした出前授業を実施しています。主たる対象は小学校・中学校・高校。期日・時間などはご相談ください。講師派遣の諸費用は、原則として学会が負担します。左記アドレスまで、どうぞお気軽にお問い合わせ下さい。

広報企画委員会【E-mail:koho@kinseibungakukai.com】

編集後記

▽くずし字を読み、和本についての知識を伝える和本リテラシー活動の実践により、名作中心の古典的な教材観にとらわれず、古典籍の多様性を通して文化の豊かさを感じ、古典として継承していくことの必要性に気づかされた。▽古典籍を教材として活用していくという意味で、教材の開発と実践的な教育・研究が不可欠であることがわかってきた。▽そこで今号は、出前授業の実践を通して、多様な古典籍を活用した教材の実例を多く盛り込んだ紙面構成を目指した。▽紅林健志氏の桐蔭学園中学校での『南総里見八犬伝』、速水香織氏の長野県飯山高등학교での『百人一首』を用いた実践。神作研一氏は和洋九段女子高等学校、桐蔭学園中学校、中央大学杉並高等学校での実践を振り返りつつ『塵劫記』、『解体新書』に触れ、山田和人は同志社女子中学校・高等学校で『とんさく新じ口』を使った実践を試みた。▽編集は、広報企画委員会和本リテラシー部門の宮本祐規子（国文学研究資料館／チーフ）・柳沢昌紀（中央大学／委員）・杉本和寛（東京芸術大学／副委員長）・山田和人（同志社大学／委員長）が担当した。▽本誌は紙媒体で刊行し、学会HPでWEB公開もしている。今後も和本リテラシーの普及と発展のため、ご協力、ご支援をお願いしたい。（山田和人）